

白氏文集 五十 題潯陽樓

加藤淳平

母の喪を終へ、長安の公務に復歸したる白樂天なれど、權限外の意見具申を爲したる咎にて、長安を遠く離れたる僻遠の地、長江畔の江州の地に左遷せらる。彼の「琵琶行」のこの地に於ける作なるは、既に記せり。この地は詩人の崇敬せる陶淵明が所縁の地なり。また孟（浩然）王（維）韋柳（宗元）と併稱せらるる詩の先輩にして、同じく陶淵明の崇敬者なる韋應物の知事たりし地なれば、樂天二人が跡を慕ひしに非ずや。この地各地の勝を訪ね、長江畔に臨む高閣、潯陽樓に昇りて、以下の詩を賦したるは、このためならむ。

白樂天、江州に於ける任期を終へたる後は、ほぼ順調に官途を進み、首都の職務の外、名勝の地、杭州、蘇州の刺史（知事）を勤め、晩年は唐の第二の都洛陽の職務多く、洛陽の南郊に居を構へ、七十一歳にして刑部尙書（司法大臣）を以て致仕せり。

題潯陽樓 潯陽樓に題す

常愛陶彭澤 常に愛す 陶彭澤

文思何高玄 文思 何ぞ高玄なる

又怪韋江州 又怪しむ 韋江州

詩情亦清閑 詩情 亦清閑なり

今朝登此樓 今朝 此の樓に登る

有以知其然 以て 其の然るを知るあり

大江寒見底 大江 寒くして底を見し

匡山青倚天 匡山 青くして天に倚る

深夜湓浦月 深夜 湓浦の月

平旦鑪峰煙 平旦 鑪峰の煙

清輝與靈氣 清輝と 靈氣と

日夕供文篇 日夕 文篇に供す

我無二人才 我に 二人の才無けれど

孰爲來其間 孰爲れぞ 其の間に來たるや

因高偶成句 高きに因りて 偶ま句を成せど

俯仰愧江山 俯仰して 江山に愧づ

（大意）私は平素陶淵明を敬愛する。この人の文章や詩には何といふ高くて深い思ひが表現されてゐるのだらう。又韋應物に對してかねがね疑問に思つてゐるが、なぜかこの人の詩情も亦すがすがしくてゆつたりしてゐる。今朝二人が詩に詠つた此の潯陽樓に登つて來て見て、二人の詩が正にその通りであることができた。偉大な長江も、冬になつて底が見えるやうになり、近くの廬山は青く、天を背にして立つ。深夜湓江の船着場には月が掛かり、夜明けの香爐峰には朝もやが立ち籠める。深夜の月の清らかな輝きと夜明けのもやの靈氣と。この江州の地は朝も夕も詩や文の對象を提供してくれ

る。私にはこの二人の詩人の才能は無いけれども、どうして同じ土地に来てしまったのだらう。この
潯陽樓の階上に乗って来たお蔭で、たまたま詩句ができたが、地上を見ても天を仰いでも長江や廬山に
愧ぢ入るばかりだ。

(令和元年十二月六日受附)